

新潮45

ISSUE 316

8

AUGUST, 2008

**殺人請負組織とライブドア
野口さん怪死事件の点と線**

（橋文哉）

- 不約合いな愛人美女に「妻を海に投げ込まれた」夫の後悔
- 「燃えなくなつたのが許せない」レズ相手を殺した団地妻の夫婦生活
- 「女房の頭をメチャクチャに」女医を狂わせた病院長とのW不倫
- 夫を「古井戸」に投げ込んで愛人と再婚した26歳看護婦
- 「今までヒラ、腰長なの！」妻の一言に逆ギレした万年課長
- 密会を目撃され「同窓会不當」相手に旦那を焼き殺させた美人妻
- 「アメになれ！」と罵られて御用になった「夫多妻党首」のアメとムチ
- 「夫も子供も優秀すぎて：『普通の奥さん』が長銀専務を刺殺するまで



総力特集

13の「夫婦」黒いアルバム

昭和&平成



- 国際結婚の果てチヨンジア人に殺された23歳元女優
- 浮気が許せない！狂った「結婚記念日」79歳夫を撲殺した77歳老女のマジメ開業医のジキルとハイド
- 「生活費20万円」でサラ金妻に殺されたシブチン亭主
- 「水をくたさい」…鬼嫁に腹死させられた「鬼屋夫」最後の7年

それでも結婚したい！
症候群

「恋愛熱」に通う女たち♥風樹茂
50代の「再婚最前線」♥菊地正康
「格差婚」の男と女♥信友直子

死に神羅動90分激白
だから私は死刑
をやめない 鳩山邦夫

（深川理恵）曾野綾子・柳田邦男・福田和也・ヒートたけし・中島哲生・岩井志麻子・タツコ・テラ・クス・鈴木李八・野坂昭如・江原智子・山口文

知られざる 清水次郎長の素顔

高田明和

（東京医科歯科大学名誉教授）

広沢虎造の次郎長伝や股旅ものの映画で有名な次郎長の活躍は多くの人の知るところであろう。しかし、江戸時代の次郎長は彼の人生の三分の二に過ぎない。彼は残りの時期をどのように過ごしたのかということはあまり知られていない。

次郎長の生き方を考える上に参考になるのは当時の知識人が彼をどのように見ていたかということである。

次郎長は明治26年6月12日に74歳で亡くなつた。彼の葬儀は15日に行われ、その記事が18日に「朝野新聞」に掲載された。

（任侠の徒山本長五郎こと次郎長の葬儀は15日、清水はと場の自宅を出棺し、梅園等に向かい埋葬せられた。当日の会葬

者は、京浜、上州、武州、三河の諸方より来る者と、近隣の人々にて、その数は数千人、貴賤高官の花輪も多く飾られた。

明治の作家樋口一葉の「一葉日記」は文学的にも非常に重要な位置を占めている。その6月18日の日記に、

「侠客驕河の次郎長死」。本日葬儀。会するもの千余名。上武甲の三洲より博徒の頭だらなるもの会する五百名と聞えた

と記されている。

「侠客驕河の次郎長」と書くあたり、この文章は短い中にも感慨のこもつた名文だと思われる。

一葉はこの日記を書いたときにどのよ

今秋、映画「次郎長三国志」が公開予定だ。日本人には馴染み深い幕末の侠客が、明治になつて、どのような生活を送ったのか。その子孫が大親分の実像を語つた。

うな生き方をしていたのだろうか。彼女は、明治5年3月25日に生まれた。彼女は明治23年に本郷菊坂で母と妹の三人で針仕事や洗い張りをしていたが、彼女自身は労働に対する蔑視の気持ちを強くもっていた。知り合いの田辺花圃が小説で多くの原稿料を得ていることを知り、小説を書こうと決意した。しかし、彼女の名を高めた「大つごもり」は明治27年に「文學界」に発表されている。つまり次郎長の葬儀の相を聞いた時には無名の貧困にあえぐ21歳の女性に過ぎなかつたのだ。

彼女はどのような気持ちで次郎長の計報を聞いたのだろうか。さらにこの日の日記になぜ次郎長の葬儀のことを書きと

めようとしたのだろうか。

もう一人の著名人は内村鑑三である。

彼は「キリスト教問答」の中で次のように述べている。

「近頃東海道の侠客次郎長の辞世の歌に目を触れました、博徒の長の作ったものでありますから、歌人の目から見ましたならば何の価値もないものであります。しかしもしウオルツオスのような大詩人にこれを見せましたならば、実に天真ありのままの歌であるといって大いに賞讃するであろうと思います。

六でなき四五とも今はあきはて
先だつさい（妻）に逢うぞ娘しき
多くの貴賤方の辞世の歌でも、文字こそ立派あれ、その希望に溢れたる思想に至つては、とてもこの博徒の述情に及ばないと思います、されば次郎長は侠客の名に恥じません、彼はこの世にあって多少の善事をなした報酬として、死に臨んでこの美わしき死後の希望を抱くことができたと見えます」

日本キリスト教の先駆者の内村鑑三のこの言葉こそ次郎長の人生へのはなむけといえるだろう。さらに鑑三が「次郎長は侠客の名に恥じません」と述べていることも重要である。鑑三、いや当時の知識人が侠客をどのように評価しているかを示しているからだ。

侠客を変えた山岡鉄舟

さて、私と次郎長の関係についてだが、次郎長には子どもがいなかった。そこで彼の兄の佐十郎の次女、まつを養女にした。次郎長は静岡県有渡郡清水町の回送問屋の高木三右衛門と、との間に

生まれた三男だった。長女のとりが米屋の山本次郎右衛門に嫁ぎ、三男の長五郎はその養子になつたのである。

次郎長は養女のまつを辻村の豊屋たつた高田元吉に嫁がせた。

元吉の祖先は古くは藤原南家の流れを

組み、争いで敗れ、甲斐に逃れた。その後、武田信玄が駿河に入り、小芝城が築城された時に入江に戻ったのである。その後徳川について江戸の宿を見張る武士として代々ここに住んでいたが、幕末には職がなく、豊屋をしていたのである。まつは慶応3年の春に元吉に嫁いたのだが、なかなか男の子が出来ず、明治11年に虎次郎が生まれた。次郎長は彼を「虎、虎」と呼んで大変可愛がつたということである。

虎次郎は由比の小倉家から妻を迎えたのだが、これがいそで私の祖母になる。私はいその息子、輝一の長男になる。いそは昭和35年まで生きていて、私に次郎長のことなどを語ってくれた。しかし、私はつい最近まで次郎長の子孫であることを公表しなかつた。ある事情



数多くの映画になってきた清水次郎長。

今年の秋には新作も公開される。

「次郎長三国志」監督・マキノ雅彦、配給・角川映画

9月20日より全国ロードショー

から次郎長のことがあまりに間違つて伝えられていることに気づき、これが歴史になると困ると考え、自ら次郎長の子孫であることを名乗つた。

幕末の次郎長はまだ博徒の勢力争いに巻き込まれていた。慶応2年には荒神山（三重県鈴鹿市）の争いがあった。伊勢の吉五郎という侠客が穴太徳に調張りを奪われ、吉良の仁吉に援助を求めた。仁吉は次郎長の子分のような形であり、またその父武吉に次郎長は若い時にわらじを脱ぎ、さらに武道でのほどきを受けたくらいであったから、大政、小政など23人が海路で伊勢に行き、有名な荒神山の法闇が行われた。

次郎長が侠客でありながら、社会のために働くようになつたきっかけは山岡鉄舟と知り合つたためといわれる。そのいきさつを述べよう。

慶応4年の正月に鳥羽伏見の戦いがあり、これに敗れた徳川慶喜は軍艦で江戸に戻つてしまつた。幕府にはまだ西軍と戦うべきだという主戦論者もいたが、慶喜は上野の寛永寺に引きこもり、謹慎の

意を表そうとしていた。

ところがいわゆる官軍は幕府を討つべく江戸に向かって進軍してくる。大總督有栖川宮、參謀として西郷隆盛を捕し、

駿府に到着した。慶喜は謹慎の意を示していることを伝えるために、最初は萬姫（家定の妻で、島津齊彬の養女）や孝明天皇の妹の和宮の使者を送つたが、交渉はうまく行かなかつた。

当時将軍の警護隊長は高橋伊勢守（泥舟）であり、彼の義弟が山岡鉄太郎（鉄舟）であつた。慶喜は泥舟の推す山岡に会い、ぜひ官軍に自分が恭順しているということを伝えてくれと頼んだのである。

慶喜に会つた鉄舟は「仰げば將軍面貌疲瘦して見るに忍びざるものあり。余が心中亦た一縷を受くるの感あり」と書いている。

鉄舟は家に帰ると、前から海舟とともに働いていた薩摩藩士の益満休之助（西郷が江戸のかく乱のために送つたともいわれる）とともに江戸を発つた。

鉄舟が横浜から神奈川に入るといつしか薩摩の兵はいなくなり、代わりに長州の兵がいっぱいになつてゐた。そこで益満を先に立てて、鉄舟はその後についていった。

「拙者どもは薩摩藩士でござる。所用あつて駿府の大總督府にまかり通る」

といふと、通行手形を持たなくとも、どこの隊も礼を厚くして遇してくれた。

その後鉄舟がどこを通つて駿府に着いたかである。じつは、3月7、8日の記述がないのだ。この両日について鉄舟は怪我をして、山比の倉沢にある望嶽亭という旅館に難を逃れ、そこから次郎長が船で清水に連れて行き、怪我の手当てをして、翌日9日に久能街道を通つて駿府に鉄舟を連れていつたという説がある。

これは次郎長が江戸城無血開城に大きな役割をしたということにもなるのだが、私の祖母はこの説に反対し、「次郎

長さんは明治になるまで鉄舟さんに会つたことはなかつた」と述べていた。

次郎長は慶応4年の3月になり浜松の總督府判事、伏谷如水に街道の探索方を依頼されている。そこで剣刀も許されてゐるのだ。当時東海道は志士、浪人、その他の無賴者の往来で騒然としており、次郎長のようにこの地域の事情に詳しく、しかも武力のある侠客に地域の安全を頼まざるを得なかつたのである。これが次郎長が表の社会と結びついた最初であり、3月の段階では次郎長は時の政治の動きとは無関係であつた。

もちろん次郎長は鉄舟の名前は知つてゐた。鉄舟は尊皇攘夷党を作り、江戸から京に向かう浪士を引率し、さらにすぐに江戸に戻るよう言わされた時も、仲間を通じて東海道を江戸に下つてゐた。つまり東海道をよく往復していたのだ。

しかし、次郎長が鉄舟に関心をもつたのは別のきっかけからであつた。

当時鉄舟は剣の修行に夢中であつた。

道歩いていて竹刀の音が聞こえるとすぐにかけこんで試合を申し出た。

さらに、「竹刀の稽古などは実戦に役に立たない」と言つて、御用聞きの若者が来ると、裸になつて、「俺のどこでも打ち込んで來い。もし一本とたら、お前の勝ちにしてやる」などと言つて、打ち込ませる。若者は面白がつて打ち込むが、よけ撃すると「もう一本」「もう一本」と限界ないので、ついに御用聞きが来なくなつた。

弟の飛馬吉が「兄さん、あんな素人を相手にしても仕方がないでしよう」と言ふと、「防具をつけた剣道などは真剣勝負では役に立たない」と答えた。すると

飛馬吉が「でも、御用聞きが来なくなると、姉さんが困ります」と言つたので、「兵糧攻めか、それは困るな」とやめたということである。

この逸話は有名だつたらしく、次郎長の耳にも入つた。次郎長は本格的には剣道を学ばなかつたが、吉良の武吉のことろで手ほどきを受けた。その度胸と勘の良さから、後に鉄舟が「次郎長は剣の奥義を極めている」と褒めているくらいである。

じつは當時博徒の争いには用心棒としていろいろな流派の免許皆伝というような豪傑が雇われていた。ところが実際の戦いになると侠客の手下に手もなくやられてしまい、役に立たないので、次郎長は誰も用心棒を雇わなかつた。ところが、鉄舟が「道場の剣法などは実戦には役に立たない」などと言つていることが聞こえ、このお母さんは少し違うと思つたと相手は言つていた。

「死んでしまえば同じ仏」

ところで次郎長と鉄舟の出会いを語るために、少し江戸開城の話を続ける。駿府で鉄舟は西郷の説得に成功する。3月13日には西郷は勝海舟と江戸の薩摩屋敷で会談し、江戸城開城の話を決めた。

ところが、江戸に入った薩摩軍の横暴は幕臣たちに怒りを与えた。戦争で負けたわけではないのにということで、船団が結成され、上野にこもつたのである。しかし、官軍の総攻撃により一日で敗残した。敗残兵は奥州道、中仙道に逃れ、戰場は東北へと移ることになる。

ところで、西郷と鉄舟、あるいはその後の勝との会談で、幕府は軍艦をすべて新政府に渡すことになっていた。しかし、海軍副総裁の榎本武揚は開洋など八隻で鶴山沖から仙台を目指した。この時に台風に遭い、成臨丸が遭難、潮に任せて伊豆半島を通り、清水港に入った。

すでに新政府が出来ており、幕府側は函館で最後の抵抗をしようとしている時である。政府軍は清水港に泊まっている成臨丸に乗り込んだ。一部の兵は海にのがれ、三保海岸に逃げたが、船に乗つている隊員は皆殺しになつた。

その死體が海に浮いていて、しかも死臭が漂い、港への船の出入り、漁業にも差し支える。しかし、政府の処罰を恐れて、誰も手出しをしない。そこに乗り込んだのが次郎長である。彼は手下を使つて、すべての遺体を回収し、葬つた。

このことを聞いた新政府は次郎長を捕らえ、処罰しようとした。その時に話をつけたのは静岡県の小參事であった松岡萬であつた。松岡は鉄舟門下でもあつた。

一方、次郎長も松岡と親しかつた。そ

こで松岡が鉄舟と次郎長の会見の手はずを整えたのだ。

鉄舟が「かりそめにも朝廷に対して賊名を負うた者の死體をどういう了見で始末したのだ」と次郎長に問うた。すると

次郎長は、「これからは今まで『賊軍か官軍か知らねえが、そりや生きている間のことと、死んじまえは同じ仏じゃござんせんか。港のやつらの稼業にだつてさしきわりやす。港のため、仏のためと思ってやつたことですが、もしいけねえとおっしゃるんなら、この次郎長、どうにでもおとがめを受けやしよ」

これを聞いた鉄舟は、「そうか、よくわかつた。よく葬つてやつた。じつに奇特なことだ」と逆に褒めたのである。

「では、おとがめはなさらんので」

「とがめるどころか、仏に敵も味方もなし、といふその一言が氣に入つた」

「ありがとうございます。そう承りや俺

も安心、仏もさぞ浮かばれやしょ。つ

いでに先生、成臨丸の兵士の墓碑に揮毫

をお願いできねえかな」

かくして、明治3年9月18日に、巴川河畔で三回忌が盛大に行われた。墓碑「壯士の墓」の側面に「清水湊、山本長五郎立之」と記されている。

鉄舟は次郎長に、「これからは今までのよう生き方はできねえ。社会に尽くす生き方をせよ」と諭した。次郎長は当時の社会には英語が必要だと考え、明治9年に英語塾を作つた。これは英国人の教諭、バークーとの契約がこじれ、長続きはしなかつた。

さらに鉄舟門下の石坂周造が牧の原の近くに異臭を放つ水が出ると燃えるというのを見つけ、火をつけると燃えるというのである。静岡学問所の講師でアメリカ人の化学者であるクラークに分析を頼むと石油だということが分かつた。石坂は次郎長の協力を得て、石油発掘会社を作つた。しかし、明治20年になると次第に探査量が減り、ついに廃業になつた。

また次郎長は清水港の港湾の整備、船舶の購入などにも力を注いだ。しかし、次郎長の仕事としてもつとも有名なの

は、富士山麓の開墾だろう。当時の県令の大迫直清は次郎長に富士山麓の開墾を勧め、このために土地を提供、さらに静岡の監獄に収監されている罪人を労働に使うことを許した。大迫は次郎長に200円を与え、さらに次の歌を送って励ました。

「富士の為にと拓け駿河なる富士の荒野のあらぬ限りは

しかし、この開墾は大変なものであり、次郎長は相当の私財をこれにつぎ込んだ。もともと牧の原のようにお茶を栽培するつもりであったが、この地は標高が高く、霜がおりたりし、お茶の栽培には適さなかつたのである。

「東海遊侠伝」の作者とは

次郎長についてもつと語ることはあるが、彼の名を有名にした東海遊侠伝の成立に話を移そう。

その著者の天田五郎は嘉永7年に福島県の磐梯郡今新田村に生まれた。磐梯国は戊辰の戦争で薩摩軍の攻撃を受け、平城は落城。15歳の五郎もこの戦いに参加

したが、戦後、自宅に戻ってみると、父母も妹もいない。かといって血の跡もないので、どこかに逃れているだろうと考えた。しかし、どこで尋ねても誰も彼らの行方を知らないのだ。ここから五郎の肉親を探す旅が始まる。

五郎は東京に出て、政府の役人・小池祥敬と知り合い、小池の家に寄宿した。

ここで落合直亮と鉄舟に会うのである。

落合直亮は国学者であり、最初は官軍のために働きこうとした。大政奉還後、西郷隆盛は幕府討伐のための大義名分を探していなかった。そこで江戸市中をかく乱する目的で、浪士隊を薩摩藩邸内に囲っていた。隊長は相楽總二（当時は小島四郎）、副隊長が落合である。浪士隊は格闘な商人や外国人との商いのある店を襲い、強奪を繰り返した。さらには江戸城の二の丸

五郎は妹を探すために、写真家の弟子になつて、写真を撮りながら妹がどこかの遊郭に売られているのではないかと日本全国を探した。明治6年には西郷軍について、台湾征伐にまで同行している。

このように家族を探すためにはどのよう危険な場所にも飛び込む五郎のことが鉄舟は気が気でなかった。そこで次郎長の顔が広いこと、さらに次郎長は地元の情報に精通し、彼の息のかかった者は勝手な振る舞いができないということに

いかず、要職につくことなく人生を終えた。このように新政府に尽くしたにも拘わらず、裏切られたという気持ちをもつ落合にとって、戊辰の戦争で別れた両親と妹を探すためには、日本全国を回つて歩くという五郎の純情さには打たれるものがあった。

一方の鉄舟も同じである。当時の仲間である藤田が悲惨な人生を送っているのに、新政府の要人として静岡県令、茨城県令などの地位につき、さらに明治5年には天皇の侍従になつて自分の懽むたるものがあったであろう。

五郎は妹を探すために、写真家の弟子になつて、写真を撮りながら妹がどこかの遊郭に売られているのではないかと日本全国を探した。明治6年には西郷軍について、台湾征伐にまで同行している。このように家族を探すためにはどのよう危険な場所にも飛び込む五郎のことが鉄舟は気が気でなかった。そこで次郎長の顔が広いこと、さらに次郎長は地元の情報に精通し、彼の息のかかった者は勝手な振る舞いができないということに

注目し、五郎を預かってもらえないかと頼んだのだ。明治11年、五郎は次郎長や俠客と生活することになった。

その生活は彼の想像を絶するような経験であった。彼は次郎長の話を聞いて、これを本にしようとした。「一名次郎長物語」と題する本を書き、鉄舟に見せたところ、知り合いが次々と読みたいといつて、持ちまわった。

一方、次郎長も五郎のために、彼の家族を探す手伝いをした。当時の次郎長の開拓事業のことを知り、自分も実業家になろうと試み、明治14年に次郎長の養子になり、正式に次郎長を父と呼ぶ関係になつたのだ。

五郎はこの本を出版しようと思うが、出版社の会社は見つからなかつた。

ところが明治17年に次郎長が投獄されるという事件が起きたのだ。じつは明治10年代に自由民権運動が起き、それが武器などをもつていて博徒と結びつき、群馬事件、筑波事件、静岡事件などが起きた。政府は大きな勢力をもつていて次郎長がこのような運動に関係することを非

常に恐れていた。

じつは博徒と結んだ民権運動は愛知でも起きていた。もともと慶応4年に戊辰戦争が始まると、尾張藩の徳川慶勝は兵を出すように総督府から命じられた。

尾張藩は自らの兵を温存するために、博徒を束ね、草薙隊として集義隊が作られた。彼らは北越に出兵し、長岡藩との戦いで戦果を上げた。明治元年から常備隊になり、藩士として俸禄を受けていた。ところが明治4年に愛知県になると、彼らを解職し、平民に戻した。このためにもともと博徒だった隊員は路頭に迷うことになり、強盗などを繰り返した。その資金の一部が愛知の自由民権運動に回ったのだ。

このようなことから明治17年1月に賭博犯処分規則を作り、大弾圧を開始、次郎長も逮捕され、収監されたのである。

当時の静岡県令は奈良原繁（喜八郎）

つた。
鉄舟は当時の博徒が逮捕されてから、裁判も受けずに処刑されたりしていることを心配した。なんとか次郎長のことを社会、とくに上層部に知らしめようとしたのだ。

そこで気がついたのが大岡育造の手文庫に眠っていた「次郎長物語」である。これに当時の文壇の大御所である成島柳北に校閲を頼み、鉄舟と海舟が挿絵を書き、大岡の喫茶社から「東海遊侠伝」として出版させた。

これはすぐに大ベストセラーになつた。これを講談にしたのが3代目の神田伯山であり、浪曲にして名調子で日本中に広めたのが広沢虎造である。

＊

次郎長の人生を見ると、幕末から明治の人間像が見えてくる。次郎長は生きがいを求めていたのだ。彼は俠客であつた時も、明治に入り実業家として活躍した時も、生きることの意味を必死に模索し続けていたように思えるのである。

（たかだ あきかず）